

<卒論>浮世の好色：山東京伝『傾城買四十八手』をめぐって

著者	亀本 美由紀
雑誌名	日本文学誌要
巻	56
ページ	69-78
発行年	1997-07-12
URL	http://hdl.handle.net/10114/00019954

浮世の好色

——山東京伝『傾城買四十八手』をめぐって——

亀本 美由紀

恋愛病の時代

この世の中の殆どの人が、人は恋愛するものだと思っている。結婚にまつわる妄想はだんだんと薄らいで来ているようだが、恋愛が必要ないという人をあまりたくさんは見掛けない。ありとあらゆる表現形態で、様々なかたちの恋愛物語が大量に生み出されている。なぜ人はかくも恋愛を求めるのだろう。

恋愛について、最も真摯にその内容を問うているのは、やはりフェミニストたちではないだろうか。それは（特にヘテロセクシャルな）恋愛が、一定の女性像、あるいは男性像を相手に要求するということと分かちがたく結び付いているからである。上野千鶴子氏は現代の恋愛をこのように見る。

恋愛が結婚に至るプロセスの一つでなくなつてからというものの、恋愛は、結婚前にも、結婚後にも、結婚の外にも至るところに求められる点で「汎恋愛の時代」とでもいう

べき時代が来ている。（中略）セックスがこんなにお手軽に手に入るようになったいま、わたしたちが飢えているのはカネでも肉体でも贖えない「恋愛」だけだからだ。

恋愛はむしろ、個人の自立の代償のようなもの。自立と孤独を自覚したときに、恋愛への渇きは深まる。その意味で、恋愛は個人主義の産物と言っている。人間が赤はだかのヒリヒリする個人になった時、裸形の個人と個人を結びつける恋愛とセックスの価値は高まった。（中略）恋愛はむしろ、無意識の共同性を意識的な絆におきかえることで、共同性を破壊する役割を果たしてきた。恋愛は共同性の敵、家族の敵。恋愛する時、人は共同性から離脱してひとりになる決意をしている^{*1}。

なるほど、恋愛を求める心とはそういうものなのかもしれない。まさしく現代は恋愛病の時代なのか。しかし、現代だけが取り立てて恋愛病の時代なのだろうか。西欧的・キリスト教的な恋愛観が日本社会に輸入されて来る前のことを、わたしたち

は忘れがちなものはないか、と考えることがある。日本文学の系譜は、常に西欧社会に比べて、女と男の関係をより大きく扱って来たのではないか。

源氏物語や和歌、お伽草子などは、肉体関係もすつかり含み込んだ女と男の関係の劇を、物語として、歌として描き出す。そして近世の文芸もまたその例にもれない。むしろ近世の文芸は、とりわけ戯作と呼ばれる読み物、あるいは浄瑠璃や歌舞伎の中で、様々なかたちの赤裸々な恋愛を大いに描いており、その点では他の追隨を許さないところがある。西鶴の好色物、近松の心中劇、そして洒落本がそうである。近世もまた恋愛病の時代ではなかったかと思わせるものが、それらの文芸にはある。

杉浦日向子氏は「洒落本は、遊所での遊びを書いた小説です（中略）風俗描写が主で、その名の通り、おシャレのマニユアルです。こんな風に遊ぶのが通だとか（中略）そういう情報が盛りだくさんで（中略）ひととおり読めば、いっぱしのシティ・ボーイになったような錯覚が楽しめます」と言う。田中優子氏は「洒落本は、遊廓世界の美意識や人間関係や精神構造まで描き出す。どんな場合にどのような話題を出すか。ものや人間やふるまいに対してどのような評価基準があるのか。どういふことが困難なのか（中略）そういうことがすべて書いてあるのである」と言う。

洒落本についてこのように書いてあるのを見てわたしが受けた大きな衝撃は、多くの人と共有出来るのではないか。極めて現代的な風潮と思われがちな要素がここには溢れているからである。

簡単に言えば、情報に依拠したハウ・ツーもの的文芸の存在は「情報化社会」と言われる現代の特性だとばかり思い込んでいた、ということである。現代のマニユアル本に通じる軽薄さのイメージが、洒落本を古典として読むに足らないと思わせた理由のひとつではないかと思う。

女性の描かれ方、女と男の関係の在り方を人々はどのように感じていたのか。また、日本近世の恋愛と文化の一大拠点と言える遊廓に於いて展開される恋愛とはどういう様相を呈していたのか。そして遊女とはいかなる存在としてあったのか。洒落本はその点を浮き彫りにするのではないか。

古典を読む悦び、というのは様々にある。わたしは、ある価値についての時空を超えた共通性と差異に出会うことで、現在の自分たちの価値観に揺さぶりがかけられる刹那に非常な面白さを感じる。近世と現代という恋愛病の時代、その恋愛、女と男の在り方はどう違うのか、どう同じなのか。洒落本に表れる「遊廓世界の美意識や人間関係や精神構造」を通じて、山東京伝という希代の人気作家の創作の姿勢を見据えつつ、考えてみたい。

洒落本とは何か

洒落本とはどういう文芸であったか。遊廓を題材にとり、その風俗とそこで展開される遊びを描いたということは疑うべくもない。それに加えて、多く言われるのは、遊廓での遊び方を通して「通」とか「粋」といった言葉で表現される生き方の手

本を示す文芸であった、ということである。現代の研究者の評価としては、遊廓の案内、遊び方の手引きとしてのそれ、あるいはそこから発展して、一夜の遊びに一喜一憂する客と遊女の心理描写に着目したもの、そして遊廓での失敗談から醸し出される「可笑味」に本質を見るものが殆どである。

洒落本の中で語られるイメージは、恋のための別天地としての遊廓である。生み出された様々な手続きや作法などの形式は、吉原へ行き着くまでの道程も含めて、異界としての遊廓を演出した。微に入り細をうがう洒落本の風俗描写は、それら手続きをして、娼婦という性の商品を、莫大な富を動かす価値を持った「傾城」たらしめるのに一役買った。

深窓の令嬢のような出で立ち、立ち居ふるまいの遊女たち。彼女たちは美しく、教養もあり、鷹揚で慈悲深い。そんな彼女らの言葉、しぐさをつぶさに伝えたのも洒落本である。

また、洒落本はその「傾城」をよく知り、遊廓を我が家のように遊ぶ「通」も描こうとする。着物、持ち物、通言など枚挙に暇がない程の情報を目一杯詰め込んだこの文芸は、細かな風俗描写とともに、そこで展開されるかけひきのすべてを〈会話〉の形態で写しとっていった。

山東京伝の洒落本

何かを（それは先行作品であったり、現実の社会・風俗であったり様々だが）模写し、それを細部に（のみ）徹底的にこだわって描く、あるいは枠組みだけを借用したまったくのパロディ

ィーを造形することで「茶」にする形態は、西鶴が、そして戯作者と呼ばれる者の多くが採用したが、山東京伝は、その手法を徹底して推進した。

『孔子^{こうし}編于時^{とき}藍染^{あいぞめ}』という黄表紙で京伝は、松平定信の寛政の改革の時代、人々がすっかり孔子の教えに染まってしまおうという、自分の生きる世界自体のパロディ化をやったのけた。それは、現実の状況がどんどん推し進められてゆくとうなるかというSFの作り方である。この黄表紙はその極端さがおかしいのだが、人々がとてつもなく倫理的で、金銀が汚らわしいという価値観が出来上がった世界では、筵にくるまった「物貰ひ」や「非人」たちが論語の読書会を行い、無理にでもお金を施そうという人が「巾着切られ」「追い剥かれ」として徘徊し、人の袂へ金を押し込んで行く。

このようにデフォルメされた現実を笑い飛ばす手法は、現実の生活や価値観に正面から立ち向かって〈反〉の立場を表明するということにはならないが、少なくとも既成のかたち・価値観に埋没することだけは防ぐことができるだろう。このように笑うことで〈非〉の立場をとるやり方は、他の京伝の作品にも共通して見られるものである。

洒落本において、登場人物たちの多くは「通」というより「半可通」とか「野暮」とか言うべき人間たちである。それ故に洒落本はあくまで笑いの文芸だという評価もあるが、しかし、一体「通」というのは描くことができるのか。型通りの通は、型通りであるという一点に於いて野暮に転落する。^{*4}

野暮を徹底して写し取り、笑い飛ばす。その作用の中でこそ

はじめて「通」の輪郭が明らかになってくるということはないか。洒落本の本質を滑稽に見るのは一面的にすぎる。

京伝の洒落本の特性は、人の知らない遊廓の情報を描いて見せる「穿ち」の手法にあるとも言われる。だが、単に「穿ち」だけに主眼があるのならば、会話の形式にこだわる必要はない。洒落本は遊廓で発展されるかけひきのすべてを会話の形態で写し取っている。

会話は関係である。であるならば、洒落本が描き出そうとしたものは、そこでの関係としての「恋愛」であると言わなくてはならないだろう。ただのマニユアルやジョークとして片付ける訳にはいかない理由がここにはある。

近世における「色」のありよう

一体「恋愛」とは何なのであろうか。近世の文芸に恋愛という言葉はあまり見当たらないが、つまりよく目にするところの「色」という言葉がそれにあたる。近世、色は「色道」として「道」にまで高められ、生き方のひとつの美学を示した。

西鶴の『好色五人女』は、恋愛が成就しない悲劇として有名になっているが、『好色五人女』の登場人物たちは、恋愛自体を強く阻まれたりはしていない。おせんやおまんのどこが封建制に恋を圧殺されているのか全く分からない、と私も思う。^{*}ただ、少々やり方がまずかったのである。有名な八百屋お七などは、浅はかにも火事をおこそうとしたのがいけなかった。物語の悲しい結末の原因はそこにある。

徳川時代は、夫には遊廓がある一方で、妻は夫以外の男性と同衾したらすなわち死、という法がまかり通った時代だ。不義密通は大罪である。だが『五人女』の登場人物には、死罪を免れ得なくなってしまうなどの悲惨な結末が予測されてもなお、その道を主体的に選び取ってゆくような潔さがあり、その意味ではかなり色に積極的である。

お七の火付けについてわたしは浅はかと言ったが、色のありようにおいて実はこの点が重要なのではないかと思っている。近世の色事は、浅はかにもウソの様に激しく自らを投げ出して行く、そういう傾向がある。冷静に待ってなどおれない。死の危険な香りを嗅ぎ取りながら、それと分かって覚悟して、それを選択する自己陶醉がある。

遊廓と金、そして色

近世の遊廓は金があるという都市空間でなければ成立しない世界である。京伝も寛政二年（一七九〇）年出版の『京伝憂世之酔醒』^{のせいざめ}という黄表紙の自序で「女郎買は。色男なるが故に貴からず黄金なるを以てたつとす」と言う。そこで繰り広げられる色はまことであってはならない。それを分かって皆、疑似恋愛に笑って大枚を使う。湯水のように金をちらす在り方は、人々が金銭に否応なくからめとられてゆくようになった近世都市空間の新たな価値として民衆の羨望の的となったのではなかったか。

実現させたのは元禄の頃、紀伊国屋文左衛門ただ一人だそう

だが、吉原では大門を打つのが江戸庶民の夢であつたという。士農工商の身分制度の最も下に位置する町人たちにとって、何らかの力を振り得るとすれば、それはやはり金によってのみである。遊廓は、封建制度の秩序や道徳から隔てられ、金によって成り立つ空間でもあつた。遊廓で遊ぶということは、究極的には気持ち良く金を使うことである。現実的・物質的な交換価値や意味など何も持ちはしない色に信じ難い額のお金を使う。最高の諧謔、最大の無駄である。

夢の如き遊興と金。この「表」と「裏」を抱え込んだ上での陶酔、あるいは虚と実の両者を渡るバランス感覚が京伝の時代の「通」と「色」という美意識の根幹にあるのではないか。このような日本近世の独自の価値観が遊廓というポストを支え、洒落本を、遊廓と色を描く文芸として江戸という時空に成立させたのではないだろうか。

傾城を買うための四十八手か

山東京伝の洒落本『傾城買四十八手』は寛政二（一七九〇）年に出版された。構成としては「しつぽりとした手」「やすひ手」「見ぬかれた手」「そはくする手」「しんの手」の五段に分かれており、それぞれ一組ずつ、傾城と客とのやり取りを詳しく描く。「そはくする手」だけはなぜか、「事繁ければ、牒数の多くならんを厭い、於是省く。」として後編を予告している。

四十八手とは買う側の手を示すのか、それとも傾城の側の手練手管なのか。どちらかと言えば後者のようにも思われるが、

読み進むうちに感じたのは、この作品が手を紹介するに止まるものでは決してない、ということである。

「しつぽりとした手」——憧れの吉原——

「しつぽりとした手」は息子株の客と突き出し間もない昼三（最高級）の傾城のやりとりが描かれている。「しつぽり」と言うだけあって、ちよつといいムードだ。客はお前の色を聞かせてくれなど言ったりする。傾城の方はそれにこう応じる。

わつちや去年までみのわの寮にゐんして、此の春から出したヨ。色をしたくつてもわつちらがよなものは誰もしてくれんせんものを

傾城とは色のプロである。それが「わつちらがよなもの」と卑下してしまうのである。これは相手を誘う手なのか。それにしても、数々の戯作にあらわれるほど、相思相愛になるような色はないのだという現実を垣間見ることが出来るのではないか。赤い布団の上で言ったことは全部うそだというのは、人々の常識である。ビジネスとしての色以外に、基本的には彼女たちに色はありえない（あつてはならない）ことを示してあまりある。

『傾城買四十八手』は各段に、二人のかけひきについての「評」がついている。興味深いのは、例えばこういう箇所だ。

今時の小むすこはとかくゆきすぎて洒落たがるものなるが、此の客はそれがなく、女郎に思ひつかるゝ風なり。

このくだりは、あからさまに、洒落本など色々なマニュアル

を読んで通ぶる「小むすこ」を批判している。単なる廓情報誌やマニユアル本を書いている訳ではないという京伝の姿勢がここに反映しているように思う。

また「評」の中に「或人曰」で始まる箇所がある。この章では以下の様な内容だ。

或人曰。「去おいらんが中洲の仮宅に居た時『モシヘ丁は天氣がよくていゝが、どふも中洲はふりんすヨ』ト云ひしはありがたき語なり」ト云々。とかくけいせいあどけなきを賞美すべし。

このくだりはいかなる意味を持つのか。この問には、作者自身ではない別の何者かの意見を借りることで京伝が表現しようとしているのは何かという問題と同義である。

最も想像に難くないのは、一般的遊女観が京伝自身の思いとは別のところにあるということではないかということである。「或人曰」の部分^{いはく}を世間の評価として、あるいはそれぞれの章の客が言いそうな意見としてまとめ、自分の意見は保留する格好をとりながら、明確に否の態度を示してしまうのである。

この場合「去年までみのわの寮に」いて江戸の地理にうとい傾城が、息子株の客がどこに住んでいるか知りたがるものの、当てようとしても地名を知らないので何やら客がじらしたような構図になる、という本文中のエピソードに対応する。中洲を、まるで全く別の国のように言う遊女について、それがよいと喜ぶ「或人」がいる。

ただし、京伝自身が手放しでそれに同意しているがどうかは疑わしい。と言うのも、遊廓が遊廓である以上、そこでの価値

は金である。客に金を出させるために遊女が演出するのは非日常であつて、現実の生活ではないのだ。生活しない女には生活能力などなくて結構。その限りにおいてはあいかたは無邪気な方がよいのである。吉原に通い詰めた京伝がそれを分からねはずがない。この評価と女性一般への評価は当然、全く別である。

「やすひ手」——錦の裏——

この「やすひ手」の章は、遊びにも年季が入り、お互い遠慮も何もなくやたらと悪口を言い合う二人の様子を描く。

京伝の洒落本に『錦之裏』というのがある。寛政の改革で処罰された三部作のひとつである。内容的には文字通り、昼間の遊廓の薄汚れた醜態を描いて見せたものである。前の「しつぱりした手」を表の理想型とすれば、吉原での遊びの現実を示しているという意味で「錦の裏」的存在の章だと言えるだろう。

客は里風という武士、遊女の方は小見世の座敷持でくらの戸という。かなりの年増とある。人物が登場するたびに、その人の風貌などをかなりの量の小書きで説明するのは『四十八手』の特徴である。それによってリアルな追体験に読み手は誘われる。

この章はすさまじい悪口のやりとりがおこなわれる。例えばこういうところだ。

「くら」コウおめへいつかちう着てきた八丈を、わつちが此むくとなつてへてくんなんしな。みせぎにしんさアナ(中略)

「里」そんなら此下着となつてへはどふだ

「くら」おらアいや。そりやアわつちがこれとにたりよつたりだ

「里」ちよきにふたりがきいてあきれらア。いやならこつちもいやだのすしだ。てめへたちやア、くがい十年塩だちをして、こんな着物がきられるものか、おしのつゑへ

「くら」しつたか、わりい酒だ

この里風という男が、遊女に何の配慮も理解もないように見えるのは気のせいではないだろう。華やかな裏に苦界を言われる厳しい現実があることを、この客のことは思い出させてくれる。

さてこの「やすひ手」に対する「評」はどうだろう。

こふ云はだの客は、女郎をひいてあそぶをのみ色男とさだめ、初会なぞにも先女郎の着物から髪の上をふんでかゝり（中略）めぐりや棒引のもとでにしたがるなり

この客は金目当ての「低い輩」として全く評価されない。ここから見とれるのは、金を使うことに遊びの醍醐味を感じている町人の客の気質と、遊女を買ってやっているとするこの侍の客の遊び方とのズレである。

では「或人」はどう言っているだろう。

或人曰「小見世の女郎は初会なぞに『わつちや子どものときは丁子やに居やした』の『扇屋にゐた』のと、とはずがたりをするものなり。これは小みせに居るをはぢてのまけをしみなり。たいがい聞ひてをくべし」と云々。

「丁子やに居やした」とか「扇屋にゐた」とか言うのは、確かに小見世にいることを恥じてのウソかもしれないが、それは

小見世の遊女を低く見る客がいることがそういうことを言わせるのである。高級な遊女とか下級の遊女などと言ったりするが、それは見世の格や彼女らの容貌など商品としての価値と場代の問題であつて、それを遊女全体の中で相対化したときに下される評価である。当然、彼女らの人間性と直接的には結び付かないのであつて、小見世の遊女を選んで遊びに来た客との関係に於いて見下されるいわれわない。

「たいがい聞ひてをくべし」と言っているのは里風のような男である。それはこの章の構成上、誰もが想像出来ることだろう。この章で読み手は傲慢な客に腹を立てるのだ。

「みぬかれた手」——遊女の仕事——

この章のお客はでつぷり太った大名の家来である。世界は大見世、遊女の方は、目鼻立ちがよく、もうすこし背が高ければ昼三になれるものを、という程なので、お客が付かないことがない。彼女は他にも客があり、このお武家様はすっかり待たされている。あんまり待たされるので、怒って帰ろうとするところへあいかたがやって来る。

「女郎」ぬしはマアなんだへ。今時分

「客」やかましい、おどれがしつた事じやない。ふとひ女郎めだ。いひぶんがあるが、よふいはぬ。うぬがやうなくさつたじよろうにはいふ口もたぬ（中略）

「女郎」マアしずかにしてくんなんし。外のきやく衆がやかましうござんす。用があんあんすなら、じんじやうに帰し

申すから。

これ以降は、すっかり言いぐるめられて、客は遊女のなすがままである。ものの言い様はひどいが、時代劇の悪代官を見ているようでとてもおかしかったりもする。町人読者へのサービスとも受け取れるが、こういう客も多かったのだろう。

吉原では遊女が常に上座に位置し、客に貞操を求め、そうでない客に遊女がおしおきしたりする。つまり、現実の世界の身分や秩序とは別の規範が存在する訳で、その逆転現象を支えるのが金の力なのである。このお武家様にはそれが分からない。平気で他の見世に通い、遊女を罵倒する。身分の高い武士の自分をそのまま遊廓に持ち込んで来ようとするからこうなってしまうのである。京伝はこのように分かりやすい形で見苦しい遊び方を見苦しく描いて見せる。

さて評はどうか。この夜もう一人の客は色男かと思いきや、「三会目にてぶ男」なのだそうだ。しかしお侍の客をみくびっているため、遊女は先に三会目の客の方へ行き、床花もせしめてきた。床花の使い道を考えながら、帰ろうとする客に「他人がましいヨ（他人行儀じゃありませんか）」とかなんとか言う。これを「てのあることば、かんしんなり（上手い手管で感心なことだ）」という一方でこういう評価も下す。

或人曰。「此女郎は、八朔の白むくも跡で又何かに染めて、二度ばれをするたちだ」と。ちがひはなし。

この章のお客のように、遊女の仕事柄から言って当然の手練手管ややりくりをことさら悪く言うのは遊廓での遊びを分かっている証拠である。そして「或人」の指摘はそっくりそれと

同じ文脈にある。確かに「二度ばれをするたちだ（白無垢を染め直して使い回すなど、抜け目なくちゃっかりしている）」が、それでいいではないかという見方が「ちがひはなし」という言い方に表れているように思う。

「しんの手」——真の手は手と呼べるか——

この章の舞台はやはり大見世で、客と遊女は夫婦になろうかという仲である。しかしながら客の方は大見世の昼三の遊女を買ったのは、金が続かない。遊女は、やり手衆に（おそらく他のお客さんもきちんとするようになど）さまざまに意見され、芸者衆や太鼓持ち、茶屋の連中からまでも、冷たい扱いをうけてしまう。作者はこの「真の手」をこう評する。

世界には女も男も無きやうな氣になり、愚痴にばかりなりて、人ばかり恨じみて来て、けつく面白く無し。（中略）何れ外から見ても馬鹿らしく見ゆれど、その身になつてはもつともな理屈もあるべきか。嗚呼、されば捨てがたきは此道の迷ひなりと双岡のしれものも書しにあらずや。

まさに「傾城に真があつて運のつき」である。ここに見られるのは遊びを越えた悲劇への陶醉であり、もはや傾城買の、あるいは遊女の「手」とは呼べない。

「評」はこの事態を面白くないとする。ただ、面白くないが、兼好法師を例にとり色道の「迷い」は捨て難いものとの見方もあることを示す。

この章段の終り、遊女が妊娠したかもしれないと告げた後に

抱き合う二人を描写する結びの部分に、突如「作者京伝曰」との文字が出現する。「作者京伝」は「ちくしやうづらめな（ちくしょう、うまくやりやがつて）」とだけ言い放ち、あとは「評」に譲ってしまう。京伝は一夜のやりとりを「評」する者ともまた別の立場を装って、上手いとも思われない重々しい色の行く末について一言茶化して消えて行く。

京伝の描いたもの

京伝の示した「手」の数々は、華やかなだけではない遊廓や遊女をしっかりと捉えている。客の言葉や遊女自身の言葉の端々からは実際の遊女の置かれている社会的立場の弱さや、客の遊女観が見えてくる。

遊女たちは、職業として色を演じ、それを客に提供しなくてはならない。遊女たちの世界は遊廓がすべてである。客を相手に疑似恋愛をくりひろげるしか、彼女たちの生きる術はない。その意味で、彼女たちは最も色を体現する存在でありながら最も色の美学から疎外された女たちであったのではないだろうか。

本気で惚れあってしまったえば「しんの手」のように、八方塞がりの状況になってしまい、心中ということにもなりかねない。遊女にとっての真の色は共同体のタブーを犯す行為である。封建社会に生きる人間が共同制や家族から放り出される時、それはやはり死に向かうしかないのだろうか。二人一緒に歩む黄泉路は仏教的な救いと刹那的な幸福感を二人にもたらさだろう。

だが、それでは現世での幸せは望めないのである。

傾城と呼ばれながらも本当に城を傾けてしまつてはならない存在。本気の色は彼女たちにとって最大のタブーであるのだから、色が生き方の美学として確立している社会にあっては、その分だけ悲しみを深くしなければならぬ。

遊女とは、売られて来て売春を強要される女である。生活の中にささやかな幸福や華やかさが存在しても、その事実が変わらない。わたしはまぎれもない売春を手放しで肯定しようとは思わないが、現実にはそこにいる遊女について、それが、生きようとする生身の人間の姿であることを見据える必要がある。遊びの演出であると同時に生きる術である手練手管を「不実」としたりする輩には、それが間違いであることを指摘しなくてはならないし、陶酔型の色は現世の不幸であり、それ以外のありようがあるのだということを指摘しなくてはならない。『傾城買四十八手』はこの点を鋭くついている。

洒落本が流行した時代は、間違いなく遊女だけでなく多くの者が有形無形の抑圧を受けた時代である。洒落本が提供したのは金で贖える範囲のささやかな救いであつたのではないか。社会制度や共同体の枠組みのあらがひ難い秩序の中にある閉鎖感。異世界としての遊廓は、日常の秩序や共同性と乖離して存在し、恋と金の力によつて日常を転覆しさえもする。それは一時的な救いと言つてもよいのではないか。

そしてその救いの中では、遊女も救いの手段や道具ではなく、救われるものとしてなくてはならない。そのためには真を尽すロマンティック・ラブ神話が解体されなくてはならないのでは

ないか。否、そこまで行かずとも、せめてそれに埋没しないだけの距離をとりたい。そこで、やはり遊びとしての色と軽い笑いが大きな意味をもって立ち現れて来る。笑いは救いである。

京伝は、誰にも癒着しない位置から俯瞰的に物事を見つめた。自分の情を披瀝せず、また感情移入させることも意図しない。だからこそ、遊女の立場もどうしようもない客も色が生み出す悲劇も可視化出来たのではないだろうか。京伝の描いた色は、誰も孤独にならないで済むための、他者への想像力に溢れている。

最近「ストーカー」と名の付くTVドラマが放送されていたが、相手の思惑を皆無視して自分勝手に突き進んでゆく犯罪的な恋愛は、自分の感情をただ、相手にも強制しているに過ぎず、陶醉する色より救いが無い。なぜなら、誰とも何も共有していないからである。この状況を京伝ならどう描くだろうか。

註

- 1 上野千鶴子「恋愛病の時代」(『ニュー・フェミニズムレビュー』①『学陽書房』)
 - 2 杉浦日向子「真があつて運のつき——戯作について」(『江戸へようこそ』ちくま文庫)
 - 3 田中優子「洒落本と数寄と情報」(『山東京伝と江戸のメディア』NHK人間大学テキスト)
 - 4 杉浦日向子「つかず、はなれず、ユラユラと——粹について」(『江戸へようこそ』ちくま文庫)
 - 5 板坂耀子「『好色五人女』の女主従」(『江戸の女、いまの女』葦書房)
- * 本文中の『傾城買四十八手』の引用は、『洒落本 滑稽本 人情本』(小学館日本古典文学全集)によった。

参考文献

『米饅頭始 仕懸文庫 昔話稲妻表紙』岩波書店親古典文学体系
『江戸の戯作絵本 続巻一二』社会思想社現代教養文庫
廣末保『新編 悪場所の発想』筑摩書房

(かめもと みゆき・一九九七年卒)